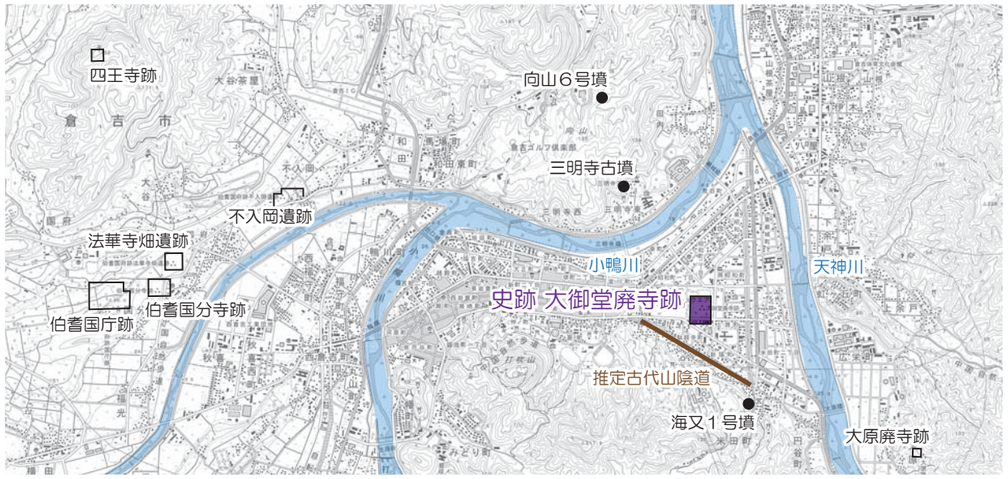
令和５年度
史跡 大御堂廃寺跡
第８次発掘調査 現地説明会

令和５年９月 16 日（土）
倉吉市教育委員会事務局　文化財課



●史跡 大御堂廃寺跡

○調査場所　倉吉市駄経寺町２丁目３－11
○調査期間　令和５年６月７日 ～ 現在調査中
（令和５年９月末まで調査予定）
○調査契機　史跡大御堂廃寺跡整備事業
○調査面積　207 ㎡

史跡大御堂廃寺跡は、７世紀中頃に創建された山陰最古級の本格的な古代寺院跡です。倉吉市街地の東側、天神川と小鴨川に挟まれた沖積地に立地します。古代の行政区画では伯耆国府が置かれた久米郡にあたり、出土した土器から、寺名は郡名を冠した「久米寺」と分かります。

周辺には、約２km 南東に大原廃寺跡（７世紀末）、約３km 北西に伯耆国の前身国庁の可能性がある不入岡遺跡（８世紀前半）、約 4.8km 西には伯耆国庁跡（８世紀中頃）・伯耆国分寺跡（８世紀中頃）・国分尼寺と考えられる法華寺畑遺跡（８世紀中頃）が所在します。大御堂廃寺跡の南には伯耆国庁跡へ続く古代山陰道が想定され、水上・陸上交通の要衝であったと推定されます。

大御堂廃寺の廃絶は、出土遺物から 10 世紀末以降と考えられます。

●これまでの発掘調査

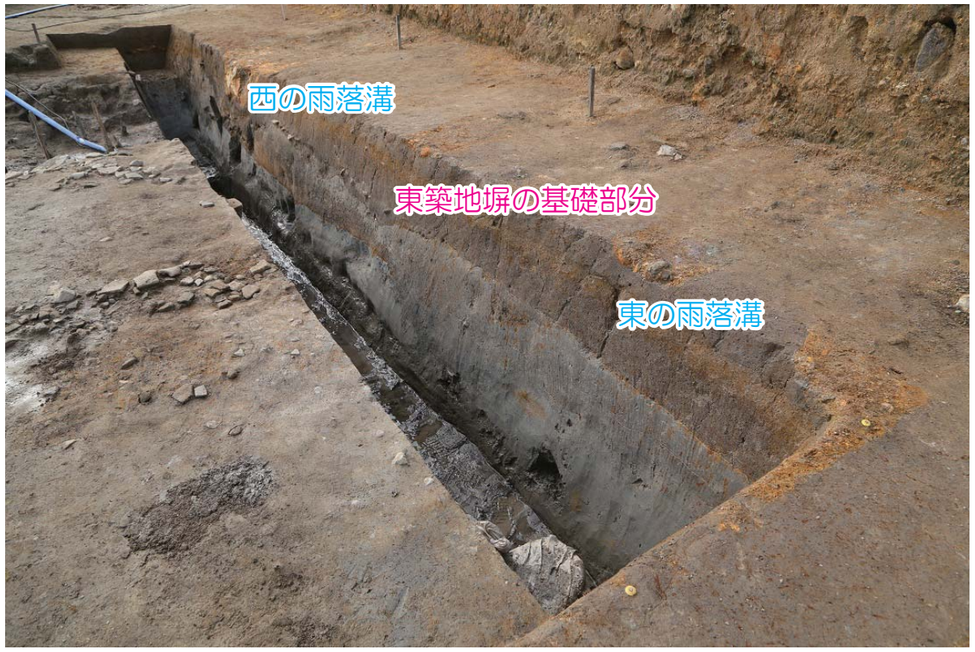
平成８年から平成 12 年までの５次にわたる発掘調査で、大規模な整地を伴う寺域や、塔・金堂・講堂・僧房・回廊・築地塀などから成る大規模な伽藍、また長大な導水施設（溜枡・木樋）などが確認されました。平成 13 年には国史跡に指定されています。

平成 30 年に開始した史跡整備事業に伴い、令和３・４年に第６・７次発掘調査を実施しました。調査では、寺域北西で東から西に流れる幅 5.6mの溝（北溝）を延長 45m の範囲で確認しました。

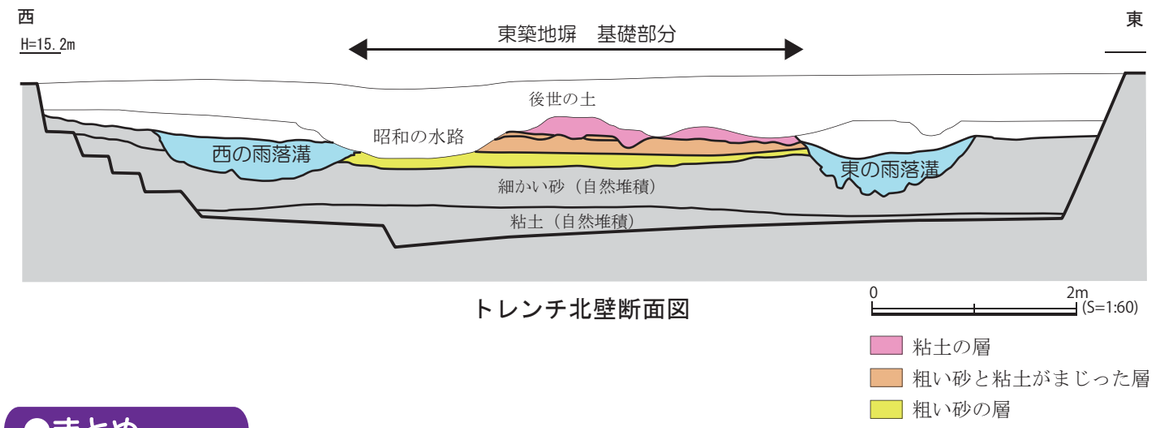
●今回みつかった東築地塀

【雨落溝】
- ◆ ２条確認。幅 1.5 ～ 1.7m。溝の中心間の距離約 6.2m。
- ◆ 寺院内の水を制御するための排水路の役割を果たしていたと考えられます。

【築地塀の基礎部分】
- ◆ 厚さ 0.5mを確認しました。
- ◆ 砂質土壌の上に、粗い砂、粗い砂と粘土がまじった土、粘土を積み重ねています。
- ◆ 版築工法は確認できず、沖積地に適した何らかの工法がとられた可能性があります。



トレンチ北壁で確認した東築地塀（南東から撮影）



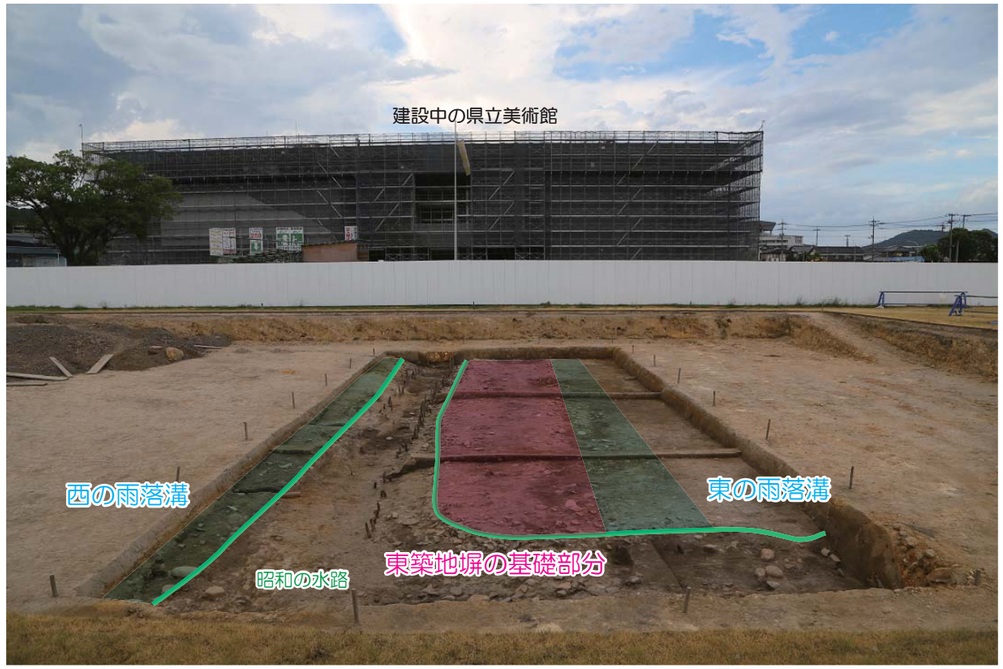
トレンチ北壁断面図

●まとめ

- ◆ 過去の調査箇所から北へ延長した位置で今回新たに東築地塀を確認し、延長 148mにわたり東築地塀があったことがわかりました。
- ◆ 東築地塀はさらに北へ延び、築地塀の北東角は今回の調査地より北にあると考えられます。引き続き築地塀の北東角を探り、寺域の北限を確認する必要があります。
- ◆ 崩れやすい砂質土壌に築地塀を築造するため、粗い砂と粘土を混ぜて基礎を固める工夫が見られます。

●今回の発掘調査

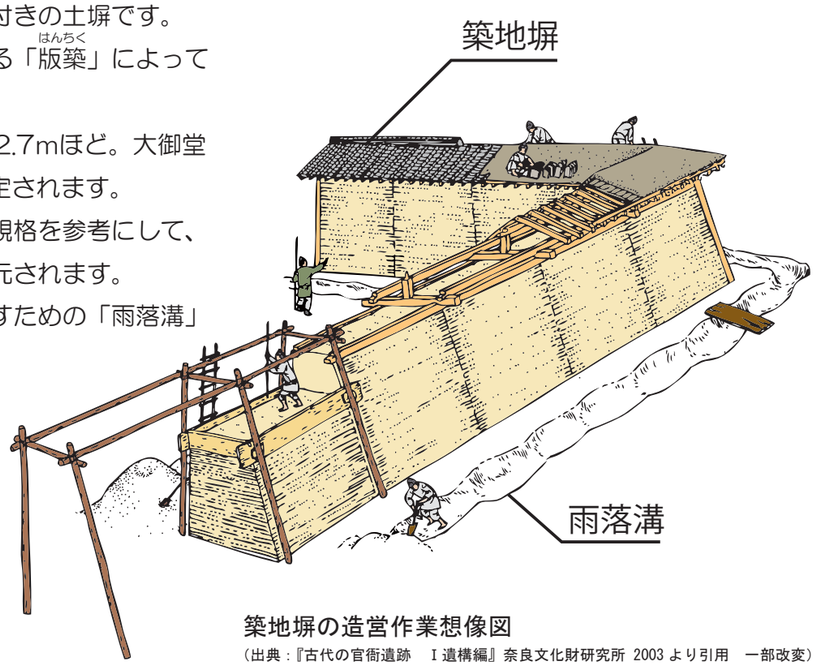
築地塀の北東角を探るため、寺域の北東で調査を実施中です。現在までに、東築地塀の基礎部分とそれに伴う２条の雨落溝（あまおちみぞ）を確認しています。東築地塀は、平成 11 年の第４次発掘調査と、令和元年の個人住宅建設に伴う試掘調査で、寺域の南東でも確認しており、今回確認した箇所はその延長上にあたります（最南端からの距離 148m）。

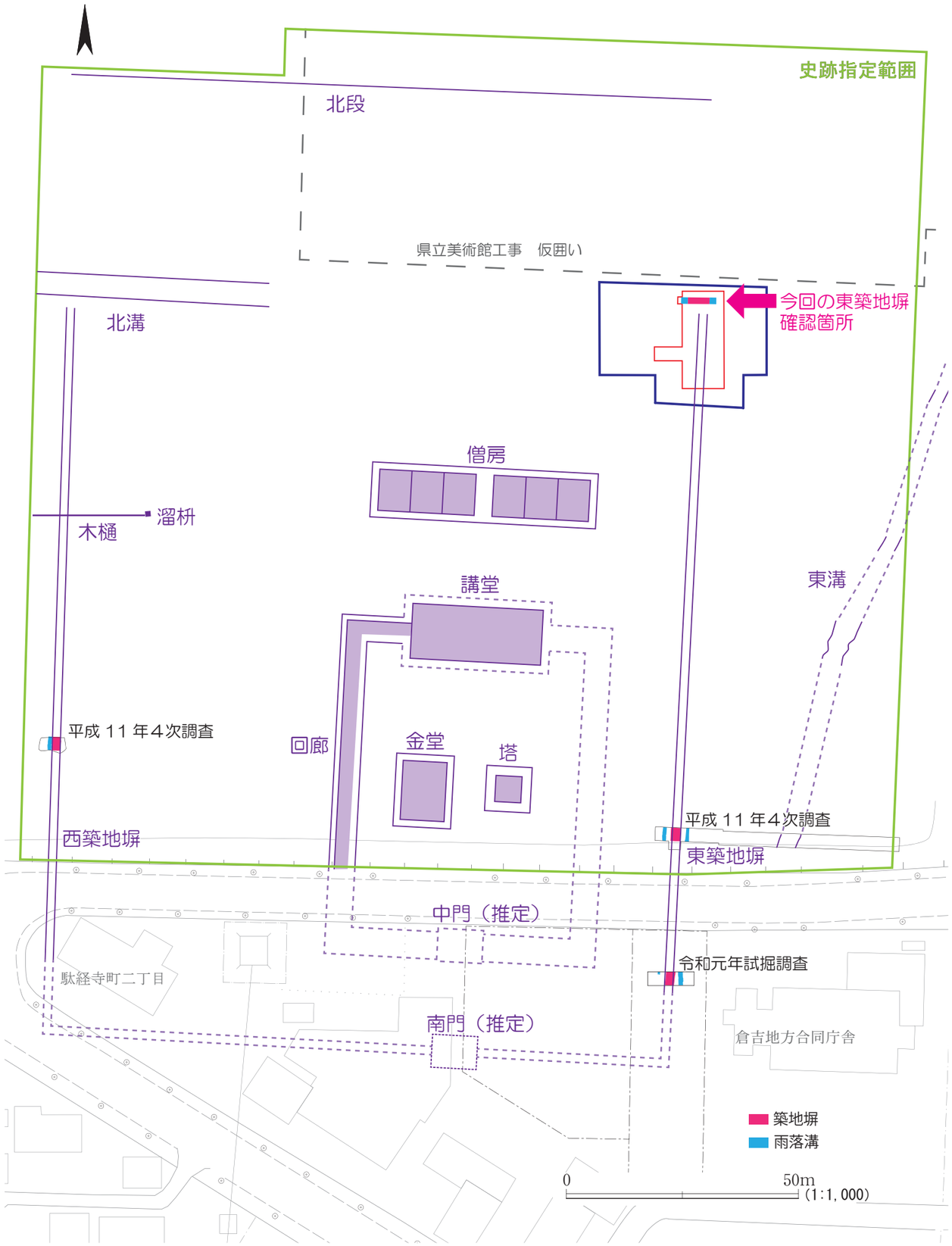


発掘調査箇所（南から撮影）

～築地塀とは～

- 役所や寺院の外周を囲む屋根付きの土塀です。
- 土を突き固めながら積み上げる「版築（はんちく）」によって造られます。
- 塀の底部幅は様々で、1.2 ～ 2.7mほど。大御堂廃寺跡の場合、約 1.8mと推定されます。
- 高さは『延喜式（えんぎしき）』に記された規格を参考にして、大御堂廃寺跡では約４mに復元されます。
- 塀の両脇に屋根からの水を流すための「雨落溝」を設けます。



築地塀の造営作業想像図

（出典：『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』奈良文化財研究所 2003 より引用　一部改変）